

駐村研究員たより

20世紀を終わるにあたって

岩 田 次 夫

ついに20世紀が終わった。自分の生きた時代を振り返ってみると、私の生まれ育った幼年時代は世界恐慌で不景気のどん底であった。その活路を日本は中国大陸への進出、侵略にと留まるところのない国策となり、米英との激突が回避できなくなり、太平洋戦争へと自ら突入することとなった。明治以降、非科学的な神がかり的虚構の上にたつ政治が行われてきた救いようのない究極だったと思う。

15年戦争ともいわれる戦争で日本人310万人がその犠牲者となった。近隣諸国の罪なき人々の犠牲は2,000万人とも言われる戦争になった。そうした時代に生まれ育った私も、その渦中に巻き込まれる人生となった。

不思議な因縁で高校生年代の15～18才、太平洋戦争下の日本海軍最大の軍港基地『呉』にあった広海軍工廠に採用され、工具養成所に学び働いた。現場配属が決まる時、溶接は目が悪いのだと教官に願い出て、パイプ類専門の部署に変えてもらった。そこは、戦時下軍機密の厳しい海軍工廠の全容のわかる唯一の部署だった。他の工廠への応援出張もあり、軍港内各所に出入りができ、たいへん勉強になった。

昭和20年、呉は63回述べ4,500機の米軍機を迎え撃つ激戦場と化し、在港した17隻の主力艦、15万人が働いた三つの海軍工廠、航空隊、市街地もことごとく壊滅。8月の広島への原爆の瞬間は20km離れた軍港のタグボート船上で受け、閃光と熱気、ピンクのキノコ雲は今も忘れられない。

出張先で米軍の上陸に備えた特攻艇「震洋」の製造に働いていたので広島への救援には行かなかった。続いて8月9日長崎への投下があった。自分の命ももう終わりだと覚悟していたら終戦となった。本廠に帰ったら、同僚たちが、「岩田、おまえは広島への救援に行かずにすんでよかったよ。むごたらしいのなんのと言ったって。」と絶句していた。彼らも私も救援に広島へ行った人達が二次放射能を浴びていることを、誰もまだ気付いていな

かった。この中からも多くの犠牲者が出たはずである。私は、部署をかえてもらったことで幾度も命拾いをした。そして、日本海軍の残存主力艦の最後をまともに見たのである。

呉で科学工業技術の先端を学び働き、死生の体験をして帰ったのだが、その当時の農村は、見るも哀れだった。水田も畑地帯も農道がなく、農作業は畜力と人力の重労働の毎日で、呉で3年働いた私には我慢のならない毎日だった。考えた末、農業農村を理想郷に変えようと思った。私は、提言し、辛抱強く意見を聞き、機が熟すのを待って、問題の解決に取り組んでいった。

タマネギの採種については、畜力では適期植え付けに遅れが生じ採種成績が悪くなる。無理をすると体を壊し一家自滅だと悩んだ末、先祖から受け継いだ水田のうち12aを売却、それを資金にあて耕耘機を購入した(昭和28年)。まだ、村内に耕耘機がなかった時代のこと、田を売ってまでと批判されたが、重労働から解放され、規模拡大、適期植え付けができ、農作業に余裕ができた。その結果、固定種の改良やF₁育種の研究に時間が取れるようになり、道が開かれていった。私の人生での英断だったと思う。ちなみに多くの人が耕耘機を購入したのは5年後で、他の人たちは、農作業から解放された時間で日銭稼ぎに土方人夫にいく人が多かった。昭和38年、F₁育種の理論技術を解明、昭和45年から量産販売できた。そこまでののに25年を要した。

株式会社七宝と七宝玉葱採種組合を活用することで、今日の七宝になった。農業改革は実現させたと思うが、農村のほうは未だしである。

日本のタマネギを支え、関係者から感謝されているが、農業農村の改革に取り組んだことで、地域の中で私を良く思わない人間も多いようだ。発想の相違でどうしようもない。そうしたこともあって、前年に亡くなった家内には随分苦勞をかけた。一つの品種が生まれるのに約20年を必要とする。そんな仕事を天職としたので、短い人生で成果をあげるのには、のんびり構えていられなかった。私は、早くから次の時代を担えるスタッフの確保と養成を重視し、2代目の若者達が志を継いでくれるようになった。若者には、お嫁さんができ、娘さんの家には専門の勉強をした若者との縁が実り、孫たちの賑やかな声が聞こえる。遠いところからも、やり甲斐のある仕事であるこそ

れぞれ専門の勉強した若者達が集まってくれている。農村に生まれた核になる人材を官公庁や大企業がぜいたくに使い捨てている。農業が滅びる元であると思う。金儲けがすべての風潮が人の心をダメにしていると思う。日本の農業を守る農村のリーダーが必要だと思うが、国政を左右している人の意見が聞きたい。

また、私は日本の農業（タマネギ分野）を守るために一筋通してきた。農協系統のみに出荷した種子が、私の願いとするところを離れ、個人の利益のことだけを考えた心ない人たちにより近隣諸国に流されている。日本の農業をつぶした時、恐るべき環境破壊がおこり、それは、日本民族の墓穴を掘っていると思う。最後になったが、一番大切なことの説明ができていない。それは、未知の分野のタマネギに取り組んだ50年の歳月は、若い日に苦悩の中で、閃き悟った人生哲学の充実とその実証が目的であった。その成果から見る時、その哲学は正しい。これからの指針として役立つだろうと思う。

昭和20年5月5日の大空襲、よくぞ助かったと思う。亡くなった同僚後輩たちに恥ずかしくない人生を歩いたと報告して、21世紀を迎えたいと思う。

（香川県豊中町・七宝玉葱採種組合長）

そばやのおばさんとエコロジー

蒲 生 芳 子

私の肩書は「そばやのおばさんとエコロジー」、只今売り出し中である。

九州は宮崎県都城市霧島の山ふもとでそばを栽培し、石うすで粉をひき、わき水でそばを打つ小さなそば屋で生計を立てている兼業農家である。昔から「そばの種を播く時は水汲みにあうな」「二百十日は土の中」かたや「二百十日はそばの縁日」と言われ、その適期に先人たちも迷いあぐねたらしくことわざも二通りある。また、そばの収穫となるとお天気まかせの賭博師の如く血まなこで走り廻ることになる。電話1本で安い外国産のそば粉が手に入る時代に、あえて地そばにこだわるそば屋“がまこう庵”は私たちの“なりわい”であり、歩んできた道、生き方なのである。

その原点は二人が農業改良普及員、生活改良普及員として赴任した秘境椎葉にあるのである。

「一粒は空の生きもの、一粒は地下の生きもの、そしてこのこりの一粒が人の食うためじゃ」と三粒の豆の種を播く老人に教えられ、椎葉の人々の自然の恵みを他の生きものとわかち合う自然観に心打たれ、椎葉の自然、四季の恵みに感謝しつつ、伝統を守り、知恵を伝承してゆく、村人のくらしとこの自然こそ、都会の人々にとって安らぎを与える“自然供給産業”として成り立つのではと考えた。

今でこそ癒し、ヒーリングという言葉でもてはやされているが30年前の話である。県から大めだまである。それでも夜々村の青年達と熱く語り合った。その時ある青年がポロリとひとこと言った。「蒲生さんたちは公務員、任期が終わればいずれ通りすぎて行く風にすぎない」と。私たちは絶句した。そして公務員をやめた。自ら実践し、自然供給産業が成り立つことを証明するため、農が商いの道につながることを学ぶため、大阪に修業に旅立った。二人にとっては仕事から人生のパートナーとしての旅立ちでもあった。1971年ゼロからの出発である。半年の修業の後、喫茶店経営、いろんな運に恵まれ3年後都城に帰郷し、霧島の山ふもと田舎そば屋“がまこう庵”を開店した。

しかし、山の中にそばを食べにくる客もなく、